スマート農業イノベーション推進会議 第1回果樹・茶作プラットフォーム 会議要旨

開催日時及び場所	日時：令和7年9月25日（木）15:00 ～ 17:00 場所：農林水産省会議室
出席者(敬称略)	黒田伊智男（黒田みかん農園株式会社）、内藤祥平（株式会社日本農業）、丸山桂佑（アグベル株式会社）、光元信能（農事組合法人世羅幸水農園）、森山聡彦（もりやま園株式会社）

スマート農業技術の活用に関する出席者からの意見

1　スマート農業技術に関する取組・課題

（技術全般）

- 人手不足の課題に対し、**スマート農業技術が万能な解決策ではなく、生産過程において肝心なところは人の目・技術が重要**であると感じる。スマート農業技術の活用メリットがある**作業を特定して導入**することが必要。
- 果樹は労働時間が長く、他産業に比べて労働生産性が低い。**労働時間が長い収穫、摘果作業の機械化**が必要。
- 温州みかんの場合、収穫時期（11月～12月）で雨が降らない日（約30日未満）に収穫しなければならない。樹形を工夫（低木、矮性台木）して人手に頼っているが、**収穫作業のスマート化は難度が高い**。
- ドローンの活用は、**樹形や農業資材に合わせた対応**が求められるが、使える農薬が少ないと十分な効果が得られない。
- **生産量の増加と品質の向上**の**効果測定**が必要。

（加工向けの対応）

- 加工向けの供給が不足しているため、果実を振るい落とす収穫機など、**加工向けに特化したスマート農業機械や品種等の導入・技術開発が重要**。このため、**加工業者を巻き込んで投資を呼び込むことを検討**していくことも必要。
- 大型選果機や加工用果実収穫機など**諸外国の機械や栽培体系が大いに参考**になるが、導入に当たっては、**圃場条件・気象等の地域特性を考慮**した試行錯誤が必要。また、海外製機械は**高額であり資金面に課題**。
- 生産者、加工業者向けに、**スマート農業技術など新たな取組に関するメリット・デメリットなど投資判断のための情報**が必要。特に**企業等の資金提供者は農業が抱えるリスクに懸念**を持っている。

スマート農業イノベーション推進会議 第1回果樹・茶作プラットフォーム 会議要旨

スマート農業技術の活用に関する出席者からの意見

2　スマート農業技術の活用に向けた生産方式や環境整備等に関する取組・課題

（共通）

- **既存の栽培管理技術等の省力効果を十分に把握した上で、どのようなスマート農業技術をどこで導入すべきかを見極める**とともに、**どのような技術開発が必要かを考える**ことが重要。
- **栽培技術・知見の蓄積・共有**ができていない。試行錯誤しながら進めている。

（省力樹形）

- 省力化や栽培管理を効率化するためには、品目ごとに省力樹形や栽培体系への転換に取り組むことが効果的。ただし、省力樹形などの試行錯誤に時間をかけていては高齢化のスピードに間に合わない。
- リンゴの高密植栽培は、省力化に効果があるが、**品種により適性は様々**であり試行錯誤が必要。農研機構で開発された**紅つるぎの早期普及**に期待。
- ナシの高密植栽培については、**省力化につながる着果部位の検証**が必要。

（根域制限栽培）

- 柑橘の根域制限栽培による管理は効果的。剪定で樹形を整えるのが基本だが、**剪定しない手法が有効な場面**がある。
- ブドウの根域制限栽培は、人手による管理がしやすく、水不足に対応できるメリットがある。一方、土の入替作業に手間がかかるなど、総合的に判断すると土耕栽培が有利な場合もあると感じる。**効果的な根域制限栽培の条件整理**が必要。
- **苗木の早期成木化**は、収穫、管理、作業改善に有効。

3　その他

- 気候変動による日焼け、病害、適地北上などが既に生じていると感じており、品種改良等の対策は喫緊である。
- 永年作物であるため、基盤整備・農地集約に特に時間がかかる。